随想

はしきふるさと

佐伯　清田義雄

ふるさとの移ろふもうし婦るさとのかわらぬも宇し
はしき布留里　　三の丸中根貞彦翁歌碑

四十五年振り佐伯に帰って落ちついた感じになった。教える立場を捨ててじっくり勉強させてもらいたい。歩いて、探して、直接物にふれることをすすめる佐伯史談会がこの導きをしてくれた。

夢中になって歩き廻った。彦岳・尺間山・椿山・冠岳・佩楯山・朝日岳・元越山・津島畑山・元越山・姫嶽などや、峠の数も十数か所は越えてみた。探りたい山や、峠の半分にも届かないが、それぞれの場所でふれる楽しみや、悲しみは歩いてわかる収穫であった。

郷土の境になる六百米を越す連山は、五十数キロに亘って北方陸路からの文化の流入をはばみ、海岸線にもまたその背後につらなる峰峰がそびえている。

畑野浦峠を越しながら、羽柴氏に教えられた秋室の詩、

入津坂

入津に下らんと欲して雲坂長し
俄に驚く気候の炎涼に変ずるを
空に横たう一嶺は南北を界し
北は麦青々として南は麦黄なり

現地を歩いてきくこの詩の解説は、秋室を知らなかった私に、たまらなく秋室をしたう気持を起させた。

ひとり歩きは発見が少ない。地域毎にすぐれた先達のいることはこの会の強みである。

九重山群の三俣山のように、近寄って見れば実は四つのピークから構成され、その間に大鍋、小鍋の火口跡を見るような会、ひとりだけ高くそびえて見えるよりも、

いくつものピークをもつ山形、私はそんな会がすきである。NHK放送で羽柴氏は、アナウンサーの佐伯史談会の歩みをたたえて、その原因の何かの問いに「うちには偉い人がいないからだ」の名答がある。

会員の生活領域の広さが、物の見方に巾があっておもしろい。現地研修に近代設備を誇る明治小学校の見学も加えられた。表彰された学校だけに、先生方の労作、鉱石標本園、屋上人工芝生まですばらしく調った設備とその経営に感心させられた。

この設備の中で若い会員の一人は、「この学校は倉庫がない」と言いきった。現代教育の裏面の弱点をついたこの感覚の鋭さに驚かされた。

若い会員の卒直さ、鋭さ、それはもっと広い領域で交わりをもつ拓本協会の同人にも度々教えられる事である。

最近婦人方の入会の多くなったことも加えて、この若い力が支えている史談会に多くの期待をかけたい。

書物は読み覚えても智恵がなければ盲目(めくら)の挑(灯)
ちん　邪魔になれどもなんの易(益)もなし。

（福岡油山　仙崖和尚の道歌採択より）

知恵とは自分の目であり、心であると解釈した。私はいま自分の体に残されている力を生かして独自な方向で歩いてみたい。自分で使える道具や機器、自分の培った技(わざ)、まだ歩ける体と目を使って、物を作って来た眼で物を眺めていきたい。

歩いて調べた場所は、直後に自分でかいた要図をつけて纏めたい。写真は、無駄と思っても何か心をひくものは撮っておきたい。古い文献は、見所要点を教えてくれるし、後の整理にも楽しみを増してくれる。知ったことは分類整理されて初めて役に立ってくれる。特にその時点で捉えた自分なりの考え方をまとめておきたい。

拓本も私の大切な武器としたい。岸河内の「日輪当午塔」の銘文でも、高政公「霊廟記」でも有名著書に誤記が見られる。津久見宗麟顕彰碑面の「永録三年に生る」の誤記は、拓本を資料と照合する中で発見できたことである。

拓本は研究材料以外に、裏打をしたり、パネルに作りあげたり、屏風仕立や、軸表装の楽しみも加わって、忙がしいことのうれしい悲鳴は生き甲斐にもつながる。

長く他郷に出ていて、老後をここにとひきつけた力の正体は何か。これからの子供たちの心の奥にひそませてやりたいその正体を一つでも捉えて残したい。